日本盆栽作家協会会報

第19号（20周年 記念号）
平成23年9月1日

盆栽は作家なくして作品なし
作品なくして芸術なし

盆栽は、二十年手元に持つと、真に自分の「作品」となります。二十年といわないまでも、最低でも十年は手元に持って自分の「作品」として愛情をかけて欲しい。それくらい心の余裕が無くては、楽しさがわいてこないし、心の眼も、真の審美眼も開けません。

そして、作家としての目的意識を持ち、個性的な作意と創意で作る。そこで初めて芸術たりうるものが誕生するのです。

日本盆栽作家協会は、盆栽界の発展のために真の盆栽の「作家」を育てていきたいと考えています。

第19回 作家展（於：大宮盆栽美術館）

第19回作家展

会期／平成22年12月3日(金)～8日(水)
会場／さいたま市大宮盆栽美術館（2F 特別会場）
主催／日本盆栽作家協会

杜松　小林國雄　紫泥外縁長方

梅（紅千鳥）　山田登美男
紫泥剣木瓜式

《日本盆栽作家協会 20周年特集》

作家展 第二十回を迎えて!!

この度、第二十回展の記念展として、日本で初めての公立の盆栽美術館において開催されますことは、作家の芸術的観点と精神的高揚に一層大きな影響を与えるものと期待され、また日本の生活文化として社会的意義を高らしめると考えます。
その節目に当たって、初心を振り返り、設立当時を思い起こしてみましょう。

日本盆栽作家協会 設立総会で挨拶する山田会長 （平成3年7月　上野・東天紅にて）

設立当初は、第一回展をどこで開催するか、なかなか適当な場所が無く、盆栽作家展にふさわしい会場探しに苦労しました。

本格的な床の間のある和室の道場として、芝の東京美術倶楽部を選んだのですが、会員以外は使用できないことがわかり、当協会顧問の片山一雨氏の紹介により決定をみたものでありました。

時期は十二月であり、正月を迎える為の作品発表会のようでありました。出品者は特別出品者で協会相談役で（財）高木伝統園芸文化振興会理事長　高木禮二氏の他、三十数席の床飾りと座席飾りを行い、業界の話題となった次第でありました。

「作家なくして作品なし。作品なくして芸術なし」私の今も変わらぬ強い信念と他の伝統文化に比べて取り残されてしまうとの危惧の念からでもあった。

協会設立は、平成三年七月　上野の東天紅において挙行され、業界を代表して重鎮の村田久造氏、

五葉松　須藤雨伯
朱泥輪花外縁丸

深山カイドー　鈴木英夫
広東丸鉢

五葉松　阿部健一
行山正方

※29頁へ続く

会報 創刊号

日本盆栽作家協会
第１回作家展

第１回作家展 案内状

記念講演をされる、前国立東京博物館次長　林屋晴三氏。

挨拶される、西岡秀雄氏。

会場風景

日本盆栽作家協会
発足のご挨拶

岡村逸三氏、片山一雨氏、顧問として西岡秀雄慶応大名誉教授、金井格東京農大教授、福島茂夫一樹会会長、片山貞一一雨会会長、読売新聞社並びに近代出版社他、大勢のご参集をいただき、開会され、発起人代表の山田登美男が会長並びに代表幹事として推挙の上、決定されました。協会設立まで十年間有志による勉強と研修会を継続しての発足でありました。

当日は、特別の記念講演会を開催し、国立東京博物館次長の林屋晴三氏を講師にお迎えして「盆栽は芸術か　職人芸か」をテーマに講演して頂きました。

「盆栽作家として生きようとされる皆さんは何をもって作家としての目的意識を持ってやっておられるのでしょうか？」と問われました。

盆栽が一つの型をずっと追っていくばかりでなく、個性的な作意と創意を持って作ること。そこで初めて芸術たりうると思う、と述

会報 創刊号

会報創刊のご挨拶

代表幹事　山田　登美男

日本盆栽作家協会も、平成三年七月の発足以来開もなく二周年を迎えますが、昨年十二月には念願の『第一回作家展』を開催し、ここに会報創刊の運びとなりましたことは、多くの方々のご支援の賜物と深く感謝する次第であります。

盆栽はいまや自然と人工の調和による『緑の芸術』として広く普及し、国際的にも多大の評価を得るに至っております。また、環境保護の機運も高まる中、盆栽作家の果たすべき役割も決して小さくなく、ますます豊かな感性を磨き、自然愛を基調とした芸風を確立することが求められております。

当協会はこのような趨勢に基づき、盆栽文化の一層の発展、さらに盆栽作家の社会的地位の向上を目的として、作家務め の高揚と会員相互の研鑽に努める所存です。

すでに本年も第二回作家展の開催を決定したほか、より広汎な活動の推進を計画しております。このささやかな歩みをますます力強く、実りあるものとするため、今後とも皆様のご理解とご支援を賜れば幸いです。

第二回作家展と賞審査について

本協会が主催する作家展は、盆栽作家の精神高揚と高度な盆栽芸を作出することにあります。盆栽作家は人間性の豊かな感性を磨き、自然愛を基本とした芸風を表現することが最も大切であり、お互いを研鑽し合い、盆栽文化の一層の発展を切望するものであります。今日の作家群が明日の社会にクリエイティブなボンサイ・アートとして、広く社会に貢献することを期待いたします。

本展は、このような趣旨に留意して出品された作品から、優秀作品を顕彰するものであります。

●高木伝統園芸文化振興財団賞
一点　賞金五十万円

●日本盆栽作家協会賞
一点　賞金五十万円

〈審査委員〉順不同、敬称略
高木伝統園芸文化振興財団賞　高木繁一
日本盆栽作家協会賞
山田登美男　小出征男　江坂幸樹
松田恭治　野上寿明　須藤進
なお、審査委員は賞の対象外。

べています。

更に協会の顧問であった佐藤昭夫教授は、この問題提起にふれて次のように述べておられます。

作家協会の作家協会たる所以は、作家という言葉が入っていることであります。『作家としての誇りがあるか』これは、作家としての目的意識こそが作家の誇りを作っていくわけで、なるほど、あの人はああいう目的意識を持って盆栽を作っているのか？　それは立派だというふうになって始めて本当の誇りになっていく。

村屋先生はこうした芸術家（作家）の資格を第一に考えているのです。「芸術＋心」これが作家という存在を作るのです。

例えば「売れる盆栽が優れた盆栽」と考えるようになったら芸術家でも作家でもない。

心や魂は逃がした後を追っても決して元には戻らないのです。

魅力ある盆栽とは何か？

今一度、初心を振り返り、設立当時を思い起こしてみましょう。

盆栽 !! 世界との絆

世界中に広がる 盆栽ネットワーク

中　国

ヨーロッパ支部

親睦旅行

屋久島 登山

忘れられない旅の
思い出の一コマ!

松を愛でる日本

松の魅力と百態景色の無限の広がり

日本盆栽作家協会会長
山田登美男

日本は、古来、日出づる松の国と言われ、松にまつわる沢山の物語が存在するのはその所以であろう。特に和歌や謡曲に登場する有名地の話は、今日でも語り継がれているが、松の種類も、赤松や黒松がほとんどであり、私どもの仕事の関係でどうしても歴史に残るような巨木や大樹、老樹と名所等に関心を持つのが当然かもしれません。

日本人が愛でる正月の松・竹・梅と雪月花の世界観などに触れて、作家協会の新たな創作資料として今後の展望をさぐっていきたいと思う。

高名な松の名所と言えば日本三景があり、松島、天の橋立、厳島でしょう。（この度、3月11日の大震災の大津波で破壊された陸前高田の松原など300年以上の赤松林が大変に痛ましい限りであります）

他方、高名な松と言えば、高砂の松、羽衣の松、末の松山など、松に対する美観は、山水画や花鳥画にとっても重要なテーマとなっています。

例えば、屏風絵の松、襖絵、そして蒔絵芸術にみる松と花鳥風月が江戸の光琳派といわれる一派が出現したように、有名な芸術家が生まれました。

松は、不老長寿の木として多くの文化人を刺激し、新しい発見となり、生活様式に日本人らしさをみることができます。

松尾芭蕉が、奥の細道で「松島や　ああ　松島や　松島や」と自然と一致した最高の境地も、私ども盆栽人には、ことの他、良く理解できることであります。

松と尾形乾山やその兄の光琳が蒔絵において一家をなし、特殊な技を発揮したように、乾山は陶器において天才的な能力を見いだしました。

それは、日本独自のものであり、南画に影響を受けたものでなく、光琳の一派の芸の昇華といわれる典雅の筆つかいと色彩を陶器の上に表現する独特の味わいといわれ、松の老樹がもつ不可思議な魅力をヒントにしているようにも思われます。

日本人が忘れることがない「正月の門松」についても触れてみたいと思う。

古い文献によると、西行法師は「山家集」に、

「門ごとにたつる小松にかざされて宿てふやどに春は來にけり」

「夫木和歌集」には、

「しめかけて立たる門の松にきて　春の戸あくるうぐいすの声」

松の名歌（古今和歌集）

「常磐なる松のみどりも春くれば　今ひとしほの色まさりけり」

「住吉の松のしづえに神さびて　みどりに見ゆるあけの玉かき」

（上段）門松。（下段左）20年前のある五葉松。（下段右）その現在の姿。推定 1,000年の老樹。

松を愛でる想いに世界が広がるようです。

徳川幕府は、謡初式に必ず、老松が謡われ、松の徳を大切に扱っている。

門松やおもへば一夜三十年
（芭蕉）

春雨や阿ひに相生の松の声
（一茶）

謡曲に現れる松といえば「高砂」と「老松」の二番があげられます。

明治に入って以降、松といえば、高山植物の五葉松が大変人気があり、山採り品を大切に培養を重ね、今日では五葉松百態景色を広げようとしているといっても過言ではないでしょう。

作家協会創立二十周年、これからの二十年を盆栽作家らしい働きをもって社会に貢献し、近々予定の国際大会を成功させるよう努力しましょう。

2011年6月4日
ドイツ・バート・ラッペナウ

第3回 アザレン・F 盛大に開催！

― 高度な飾りの作法に感心する ―

ウド・フィッシャー氏と筆者。（床の間の前にて）

6月2日、成田からドイツのフランクフルトへと向かう。ウド・フィッシャー氏とハーラルド・レーナー氏の2人から、ドイツの「アザレン・フェスティバル」に講師として招かれた為だ。

第一会場は、「水の城」という池の中にある小さなお城（バート・ラッペナウ水城・バート・ラッペナウ市）を借り切っての催しである。1階から4階まである部屋の全てが展示と売店で埋め尽くされていた。会場には5カ所の床の間が作られ、掛け軸や下草、添景にまで気を配り、景道の作法がこんな所にまで知れ渡っている事に、私は驚かされた。

会に予算が無い為に、隔年での開催と聞くが、会場から800kmも離れたベルギーやオーストリアからの参加者もいる。オープニングのテープカットは、ドイツ日本領事とバート・ラッペナウ市長とウドさんと私の4名で行われた。入場と同時に琴の演奏があった。弦の強弱の音色のリズムがとても素晴らしく、若く美しい日本女性の魂の演奏が私の琴線に響いた。

講演は、私の園で3年間修業を積んだ、ドイツ人のバレンティン・ブロセ（バレー）君が助手と通訳をしてくれた。彼はとても植物が好きで、真面目で向上心が強く、センスも悪くないので、必ず盆栽作家として成功してくれるであろう。そしてドイツに盆栽文化を伝えてくれるものと期待している。

水の城でのワークショップとデモンストレーションが終わるとすぐに、第2会場に移動する。高速道路を約4時間近く猛スピードで走り、ランツベルクの小さな町のホテルに着き、夕食をとる。夕食といっても夜の10時過ぎである。しかしこちらの10時は空がまだ明るいのにはびっくりさせられた。

翌朝、早起きをして、町の中を散策していると、レーナーさんの盆栽園を見つけた。町というより村といった方がいいかもしれない。家の隣には牛舎があり、畑よりも牧草地の丘が見渡す限り広がっている。宿泊したホテルで10名のワークショップを行った。

翌日、レーナーさんの庭を拝見してから山に向かい、ロープウエイで山頂まで登った。断崖から舞い上がる気流に乗って若者達がパラグライダーを楽しんでいた。我々は鎖とロープのついた断崖を岸壁にへばりつきながら下山した。私の海外での楽しみは、古い建築を見ることや人との邂逅、またこのような大自然を満喫することである。

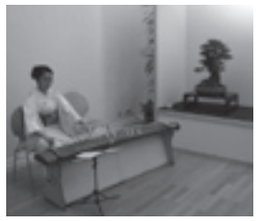
（日本盆栽作家協会常任幹事
小林國雄　記）

バランスの良い配色の一般席

多くの愛好者が盆栽の花季の姿を堪能した

助手のバレー君と実演

ドイツ日本領事官に盆栽を説明する



日本人が奏でる琴でお迎え

テープカット風景

日本盆栽に新時代の兆し

景道二世家元　須藤雨伯

私は、２００１年以来、中国盆景芸術家協会の要請により同協会の高級顧問という役職に就いています。

２００１年から現在までの約10年間に私は、数回中国を訪問し、中国の盆栽人と交流を深め、現地の盆栽の状況を視察するとともに、創作・鑑賞両面で様々なイベントにも参加しました。

そこで感じたのは、10年前に比べて、現在の中国盆栽が劇的な進歩を遂げつつある点です。この点は、いくら強調しても足らないほどで、過去、中国の盆栽が日本の盆栽より技術的に劣る点があったとしても、もはやレベルとして遜色ないまでになっています。

ただ、中国の盆栽と日本の盆栽は、根が一つでありながらその後の歴史的経緯や文化の違いによって、少し異なるものになってきています。

そもそも日本の盆栽は、奈良時代以来幾度も繰り返された中国文化輸入を起源とするものです。盆栽の歴史を深く研究された岩佐亮二先生や丸鳥秀夫先生によると、日本には五代から宋代にかけて盆栽が入ってきました。

ほぼ10世紀から11世紀頃、日本の歴史区分では平安中期にあたる頃です。現物を輸入したのか、渡来中国人が携え来たかは不明。絵図などの資料によると遅くとも鎌倉時代には日本に入っていたのでしょう

渡来年がいつだったかはともかく、盆栽、盆景、盆石などは当時の文明先進国・中国からの高級舶来品、もしくは渡来高僧などの趣味の品であって、上層階級のごく一部の人にしか楽しめませんでした。

日本という国は外来文化を摂取することに熱心で、いつの世にも「舶来崇拝」熱が高く、邦産より外国産をありがたがる風がありましたが、それと並行して外来の文化や風習を日本人の好みにかなったものへと改良する働きも盛んでした。いわゆる国風化です。建築、衣服、食品から仏教、絵画、書、喫茶など、あらゆる面にそうした傾向がうかがわれます。

盆栽や盆石についても同じことが起こったのです。

盆栽は神仙思想が起源

初めて日本に盆栽がもたらされた時、それはどのようなものだったのでしょうか。

日中両国のこれまでの研究によれば、園芸文化の発展形態の一つであって、その基礎には道教の神仙思想がかかわっているらしく思われます。道教は、中国土着の自然宗教で元々は自然崇拝と呪術を主とするものでしたが神仙思想を取り入れ、風水や卜占などの方術を取り入れ、また仏教が入ってくると荘子や老子なども取り入れて教義の体裁を整えました。道教では中国思想に共通する、目に見えない「気」に根拠を置き、「気」から天地万物が生成展開すると考えます。

神仙思想とは、修業によって神仙となり、不老長生が得られるという信仰です。その修業の要は山水の「気」を体内に取り入れることで、早い話が深山・高山に庵を結び、仙人になる修業をするといいます。

しかし、深山・高山に棲んで修業するのは大変です。そこで、市井（しせい＝町中）にいながら「気」を養い、同時に生活空間に安らぎをもたらす装置としての庭づくりが行われるようになり、さらにそれを集約したミニ庭園＝携帯庭園としての盆栽が誕生します。

いわば携帯できる山水が盆栽であり、絵に描かれた山水が水墨画などの山水画なのです。

庭園の場合、「気」「神仙」の象徴として蓬莱、方丈、瀛州（えいしゅう）の三神仙を石組や樹木で表すのですが、原初的な盆栽もやはり蓬莱山などを象る例が多かったでしょう。

江戸期に二極分化した盆栽

盆栽の将来を見据えるためには歴史を知ることも大切ですが、私には荷が重いのでごく簡単に略述します。

室町期の「春日権現験記」や謡曲「鉢木（はちのき）」などに盆栽が登場し、足利義政の盆石・盆栽好きも良く知られています。

江戸期には、三代将軍・家光の盆栽好きが有名で、その面影は皇居の盆栽群に偲ぶことができます。

また、江戸期には下級武士や商人、庶民にいたるまで、鉢物愛好の風が広まり、長屋の住人が下町の路地の軒下に鉢を並べて丹精するのが日常の風物となりました。

浮世絵版画などに描かれた彼らの鉢植（盆栽）は、大名たちの愛好した盆栽とかなり違います。いわゆる（蛸作り）が主流で手頃な大きさ、つまり江戸期には盆栽は二極分化していたと思われ、各々、本格盆栽、縁日盆栽として、連綿と受け継がれていくことになります。

幕末になると、維新の志士たちによって、文人植木が愛好され、これが明治初期～中期に全盛を誇った文人盆栽の源流となりました。

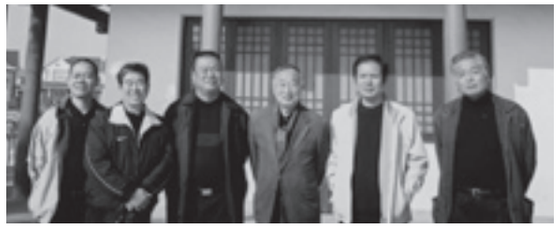
禅・煎茶・抹茶と盆栽

禅と煎茶は、密接なつながりがあります。鎌倉・室町期に、禅僧が盆石や盆栽を日本にもたらした時、当時中国で流行していた煎茶趣味が、禅の修業の一環として取り入れられ、禅僧の間で煎茶が好まれていたのです。いわゆる茶禅一味です。そして、煎茶を点てながら、水墨画などを鑑賞する煎茶席には盆石や盆栽も飾られました。盆石や盆栽の鑑賞にも禅的な見方が加味されます。

煎茶は、室町期から江戸期にかけて、一般にも非常な盛行を見、庶民の間でも煎茶、あるいは番茶・焙じ茶を飲む習慣が定着します。抹茶との両輪で、明治期にいたるまで続くのです。

一方の抹茶はというと、桃山期に次々と大茶人が輩出し、やがて千利休により侘茶が大成されます。抹茶の主な担い手は将軍、大名、高僧、貴族、大商人などの裕福階層。抹茶にも禅の精神性は取り入れられ、盆石や盆栽をともなう席飾りがあります。その後、抹茶は家元制度の確立もあって権威を増し、煎茶に代わって茶道本流の地位を占めるにいたったのです。

明治期の青湾茗醮図誌や美術盆栽図譜に煎茶飾りが出ていますが、これは煎茶家元や文人趣味家の間で脈々と伝えられていたのでしょう。しかし、型が無く自由さを良しとする煎茶は、明治以降一人一派といった状態に陥り、文人盆栽の退潮とともに衰えていきます。



中国の盆栽園見学にて
（2004年、中国・上海）
（右端：筆者）

盆栽には、茶道から受け継いだ侘・寂の精神があり、また、禅に由来する厳しさや力強い生命観もあります。

ただ、それらを盆栽作りに反映させるのは、非常に難しい。具体的にどうこうするというより盆栽作りや盆栽鑑賞の理念と捉えているのが実情でした。

実際のところ、植物を材料に大自然の生命力を表す盆栽は、親しみやすくわかりやすいのが他の芸術に対して大きな利点です。と同時に、植物美によりかかりすぎると単なる園芸に堕してしまう危険性もはらんでいます。

その歯止めとなるキーポイントが、侘・寂や禅の精神性といえるでしょう。

文人盆栽から自然美盆栽へ

中国文化尊重の風は、根強いものでした。日清戦争（明治27年／１８９４）を境にようやく退潮を見せるまで、実に千年以上も続いたのです。

中国の盆栽の流れから日本独自の盆栽へと切り替わる別れ道は、幕末頃だったでしょう。その萌芽が文人盆栽でした。

今日、文人盆栽というと脱俗とか超俗のイメージが強いようです。しかし幕末に（維新の志士）達により再発見された文人盆栽は、確かにそういう慰安・愉悦をもたらす面もあったのでし

ょうけれども、根本的には反骨・反俗精神のあらわれだったと思います。既成の、世に行われている盆栽ではなく、かつて中国の文人たちが愛した盆栽。それは在野で経世済民を考え、世直しを構想した志士たちにとって必然の選択でした。

明治維新後、文人盆栽は、一世を風靡し盆栽の主流になります。ほぼ、明治中期くらいまでは文人盆栽一色といっても過言ではないでしょう。しかしその中で、徐々に変質・陳腐化していきます。樹姿から厳しさが薄れ、画一的なものになっていくのです。

これに反発して生まれたのが、美術盆栽であり、自然美盆栽でした。明治後半から昭和初期に至る日本の盆栽黄金期はこのような経緯を経て生まれ、近代的な盆栽へと脱皮したのでした。

中国盆栽に学ぶ点

先にも触れましたが、今日の中国の盆栽は、10年前と比べて格段の進歩を遂げました。特に感心するのは、雑木の枝先です。実に上手い。その樹種の特性を把握した上で、テーマ（意境）にふさわしく仕上げています。

中国では、盆栽に「意境」という景名をつけ、これを非常に重視します。おそらく欧米諸国のオリジナリティを尊重する芸術観と中国伝統の「銘」とを重ね合わせた産物でしょう。作品そのものと同じくらいの比重で景名を評価対象とするのです。

日本でも命銘の習慣はあるものの、類型化の傾向が見られます。典型と類型は紙一重の差。しかしその紙一重が大切なのです。命銘にあたってより深く考えるとともに、例えばテーマ性を盛った樹作りとか、席飾りに際して席題を設定するなどの工夫が必要かもしれません。

中国では景名に沿った樹づくりということも普通に行われ、植え付け位置・角度、幹模様、枝の角度、枝先表現にいたるまで実に良く考え抜かれています。

この辺は、日本でも見習いたいです。

日本ではきれいに仕上げる技術というのは、プロも愛好家もかなりのレベルに達しています。しかし真の盆栽の枝表現はそこから先の領域。この樹にはこの表現しかない、というところまでいかなければ盆栽の真髄は表せません。

中国で日本の盆栽に関して「きれいすぎる」とか「造形的過ぎてつまらない」という意見を多く聞きました。形はきれいだが風韻に乏しい、とか。確かに盆栽から風韻を取り去ったら単なる植物美しか残らず、それでは園芸品と同じです。

中国の日本盆栽評が全て正しいとは思いませんが、私の目から見ても現在の日本の盆栽の作り方にいささか風韻を欠く点があるのは否めません。

では、どうしたらよいか？

そこで私が思い浮かべるのは、明治初期の文人盆栽や大正末から昭和初期頃の盆栽です。国風盆栽展記念帖などに見るそれらの盆栽は、必ずしもきれいにまとまってはおらず、また培養不十分な樹とか樹作り途上と思われる未完成の樹さえ含まれています。しかし実に味わい深い、風韻に富む樹もまた多いのです。写真で見てさえそう感じるのですから、実物を見ればどれほど心動かされることか。

樹作りに際して、これらの盆栽を参考にするのが良いでしょう。

ただし短絡的に、例えば昭和初期なら昭和初期の盆栽を真似るのでは意味がありません。最終的に真似ることになるとしても、なぜそのような表現になったのかに思いを馳せ、想像し、作り手の身になって考えることが大切。盆栽表現を深めるには、この樹の枝作りはどうあるべきか、またそれで何を表現したいのか、といった事柄を深く考え抜くことです。それが、遠回りなようで案外近道になります。

原点に帰り文人画から学ぶ

盆栽に限らず伝統芸術の習得は「真似」が基本だといわれます。先人の優れた作品や型を真似し、自家薬籠中のものとしてから自分の工夫で新しい部分を加え、個性的な新作を生み出す。

盆栽でも、優れた作品を目標に樹を作ることは大いに推奨されることですし、先人や先輩から盆栽技術を学ぶことは技量上達の早道です。しかし、ここに一つの落とし穴があります。先人の試行錯誤をパスできるからこそ早く上達できるわけですが、勘違いして形だけを真似てその本質を見ないと類型化してしまうのです。市場的な価値で言えば類型化こそが儲ける為の早道でしょう。しかしそれで真の名木が生まれるかは疑問。

明治初期、文人盆栽草創期の先人は、松なら松にいかに盆栽精神を込めるかに精根を傾けました。自然美盆栽にしても単なる写実ではありません。

文人画の本流は「写意」。中国でも日本でも18世紀になると西洋画の影響を受けて真景図という一種のリアリズム文人画が出現しますが、主流にはならず、また徹底したリアリズムではなく写意性を加味したものでした。

写意とは、自然そのままを写し取るのではなく、一旦自己の中に生き生きと掴まれた自然のイメージ＝エッセンスを掴み、それを画布の上に描き出す、いわば再構成作業です。文人画の要請として「胸中の丘壑（きゅうがく＝山野）をこそ描け」などともいわれます。

盆栽で表現する自然美もやはり写意なので、文人画を学ぶのは盆栽人にとって今後非常に有益です。

新たな盆栽文化創造

中国の盆栽で一つ不満があるとすれば、例えば真柏です。枝の作りは上手で、高山の雲霞棚引く中に枝を広げる様子などを巧みに表現する例も数多く見ました。しかし、ジン・シャリ表現ができていない。そもそも、盆栽におけるジン・シャリの意味が中国人には理解しにくいようなのです。いや、言葉では理解できても実感しづらいのかもしれません。そこはやはり文化風土の違いでしょう。

いうまでもなく、ジン・シャリは、死の象徴。緑豊かな葉や鮮やかな樹皮の比色を見せる水吸（生きる道）との対比によって、樹の生命力を強調します。

さらに侘・寂の世界です。日本の感覚からするとジン・シャリの無い真柏は一つ物足りない。

この侘・寂という美意識も、中国に限らず、海外の人には難物でしょう。侘・寂は、中国から渡来した茶道が、日本で独自の発展を遂げて生み出された美意識です。

盆栽の場合、とりわけ山野草盆栽において、侘・寂を重視しますが、一般盆栽でもそれを一つの味わいとして表現することが多いものです。

簡略の美、時代感、侘・寂、幽玄、もののあはれ、枯淡、これら日本文化が育んだ美意識は、世界に誇れる高水準のものです。その美意識が作り上げた盆栽の価値は、多くの国、多くの文化圏で認知され、最高の目標となっているのが現状です。

今日、中国盆栽の隆盛を見て脅威論を唱える人もいますが、私はそうは見ていません。中国盆栽の隆盛は日本にとって実にありがたい追い風だと思います。むしろ日本の盆栽にとっての恩恵の方が大。

異なる文化が出会う時には、何らかの葛藤が生じ、それこそが発展の原動力となります。同根にして異なる発展を遂げた日本盆栽と中国盆景の出会いは、長い目で見れば新たな盆栽文化を生み出すでしょう。

中国盆景のさらなる発展を祈るとともに、わが日本の盆栽も原点に立ち返った深化を遂げるよう大いに期待しています。

盆栽人生 五十五年

群馬泰峰園　田中 泰道

伊香保研修旅行にて（連取りの松の前で。左端が筆者。）

入院中のクリスマス会

前橋北部支部のメンバー達と

私が、盆栽に興味を持ち始めたのは、12才の頃からです。近くに自然が沢山あり、近くの山から黒松を取ってきて育てていました。

27才で植木市場に見習いに入り、31才で本格的に商売を始めました。

それから25年間、毎月、四国、九州と全国を飛び回る生活をずっと続けています。

平成3年には、作家協会にも入会しました。また、群馬社会保健センターでの盆栽と庭木の教室の講師を18年間続けており、地元では、商工会の会長として6年間、また、公民館、自治会の活動と多岐にわたって活動中です。

忙しすぎて体調を崩し、一時、長期入院もしましたが、なんとか普通の生活ができるくらいに持ち直しています。その時、病院でクリスマス会をやったりして、楽しいこともありました。

その間、子供3人にも恵まれ、家も新築し、好きな仕事にずっと携わることができ、愛すべき家族を持ち、盆栽のおかげで、非常に充実した人生を送っています。

これからも、盆栽を愛し、人生を楽しみたいと思っています。

《盆栽展望》

日本盆栽作家協会20周年に思う

吉花園　鈴木 英夫

S.D.A.B セミナー発足時メンバー（於イタリア）

ウド・フィッシャー氏（右）とその作品。左は、筆者。

イタリアグループの作家協会本部への訪問

ヨーロッパ盆栽芸術学校（S.D.A.B）

私が、作家協会に入会して十数年になる。その前にヨーロッパに学校を発足させた。

盆栽趣味者から、40才にして初めて盆栽のプロの生活が始まった翌年、当時ヨーロッパの愛好家のほとんどが小鉢に入った園芸品も〝ＢＯＮＳＡＩ〟として業者も共にそのレベルであった。

１９８８年、イタリア・トリノで愛好家の提案で、ヨーロッパ盆栽大会が行われ、それに招待された。全ヨーロッパから愛好家が集まり、当時として最大の大会となった。

トリノ在住の愛好家の熱意で１９９９年、盆栽芸術学校（Ｓ・Ｄ・Ａ・Ｂ）が開校、その講師として着任。８年制16教課（年２回）の本格的な盆栽学校となった。

盆栽の基本、樹形作り、持込、席飾り、日本の文化、ワビ・サビ等々、展示会の規格まで全てが学べるものである。

当初、一クラスから始まったものが、現在では、イタリア、ドイツ、フランス、スイス、全ヨーロッパに20クラス約３００名の愛好家が学んでいる。

デモンストレーション（講師：野上寿明）

S.D.A.D 寄植セミナー　デモンストレーション（於イタリア）

ピノムゴ大もの盆栽（フランス愛好家）

デモンストレーション（講師：今井千春）

8年間を終了した卒業生も100名を超えている。

それぞれの国・地方で指導者となって、日本の盆栽文化、芸術性を広めた。

社会的にも、ヨーロッパの文化に溶け込み、テレビ・新聞に、放映・記事にされ、現在に至っている。

国風展、作風展、大観展に各団体が訪れる様になり、真に〝盆栽の国際化〟の時代となった。

作家協会の役目、入会した理由

私が作家協会に入会した理由はその理念にあった。盆栽作家となって盆栽文化を伝承し、作品の発表で社会的に盆栽の芸術性、作品の品位、生きる芸術として高い評価を貰える業界を確率できることを期待した。

作家協会ヨーロッパ支部を設立

入会の翌年、ヨーロッパ支部をイタリア人アウエル・オートマ氏と相談し設立、その発足にあたって、山田会長出席のもとにブレッサノーネで展示会と同時開催し、盛大に行われた。

日本人のゲストは、その後もいろいろな人が招待され、〝盆栽の真髄〟を

2004 年　ヨーロッパ支部作家展（於ドイツ）

愛好家の棚場（於スイス・ルガノ）

スイスの愛好家（S.D.A.B 生徒）

学んでくれた。

現在は、約300名がヨーロッパ作家協会会員となっている。会員は各地方で〝正しい盆栽〟のヨーロッパに定着させる為に活躍している。

日本の盆栽界の衰退

それに対して、日本の盆栽界はいかがであろうか。約20年間、ヨーロッパ訪問、3年前に帰り、日本の盆栽界の現状は、私にとってはまるで竜宮城から帰ったようなさびしいものである。

盆栽愛好家の高齢化、激減、プロの減少、盆栽価格の低下、作っても売れない現実。協会、組合、愛好家団体がそれぞれ、それを解決すべき努力はしている様であるが、先が見えない。

地震、津波、原発事故等々もその原因のひとつではあるが！

今、私はその現実に直面しているが、何とか打開しなければと模索している。

自分にできることは何であろうか？

自然が好きで入った〝盆栽道〟ゆっくりとその風景を求めつつ、各地方に出向き、愛好家またはその団体に積極的に訪問指導することを考えている。

70才になる今、実現できるだろうか！

ほんとうの盆栽の美とは…?

竹楓園　須藤　進

最近、私は盆栽に対して感動が無くなってきています。盆栽に対する感心すら薄れてきているようにも感じます。何故なのだろうと思い、自身の盆栽のあゆみを振り返り、少し探ってみました。

原因は高木禮二コレクションによる盆栽を預かり、高木禮二の盆栽三昧に触れたことだと思いました。高木さんは真から盆栽が好きだったのだなと、しみじみ感じました。盆栽を預かり、高木盆栽美術館をオープンし、その後、高木禮二氏の指導の元、数年をおつきあいさせて頂きました。

私が目を覚ませば、いつも目の前には、日本の盆栽界を物語る、名木がずらりと並んでいました。それらの盆栽と五年間、対峙することが出来ました。

私の盆栽人生において、これほど至福の時はありませんでした。これぞ歴代の盆栽大家が味わった醍醐味であると思いました。名木に囲まれて暮らす毎日、そして毎週位に訪れて人生訓や盆栽の楽しさを語る高木さんとの時間は、尊敬する親父と語り合ってるような、すばらしく心地良い時間でありました。

これらから学んだこと、諭され、さまざまなお話が、私を大きく成長させて頂いたと思っております。

しかし、ある時、高木禮二氏の突然の他界、そして高木盆栽美術館の終了、これらは私の盆栽人生の終極を思わせるような絶望感を感じました。

私の高木盆栽美術館は理想郷であり、私のユートピアでもあったわけであります。これらを一瞬の内に全てを失ったわけであります。この絶望感のあまり、私は盆栽に対して、精神が空虚なものとなってしまいました。

しかし、時間が過ぎるにつれ、盆栽に対する美意識が変化していることに気づかされているのです。目の前から名木が姿を消して、空白の庭園を観る度、盆栽の美とは何であろうかと、疑問を持つようになりました。

盆栽の名樹とは形や姿、持込がどれほど優れた盆栽であろうとも、それを所持し、認めた人が盆栽と人の精神が一体となる、あるいは盆栽と人が合一した時に名樹が生まれるのだと思いました。ゆえに盆栽の名木とは、所持する人の人格までもが要求されるのだと考えます。

例えば、「日暮し」の名樹は、高木禮二との出会いにより、縁を生じ、高木禮二の美意識により、完成され、日本一の名樹となったのであります。

しかし、同じ名樹を、さいたま盆栽美術館で観ますと盆栽としては立派に管理され、きれいに飾られていました、しかしその姿は、私には魂の無い抜け殻のようにしか観えませんでした。

私の目には、美しく輝いた「日暮し」の姿はどこにもありませんでした。

私は、高木さんが盆栽の鑑賞眼は優れている人であることは、私にはわかりませんでした。お金持ちかお金にまかして、盆栽を買い集めて収集しているとばかり思っていました。

しかし、私たちにはとうてい及ばない高い次元で盆栽を観ていることに気づかされました。

高木盆栽コレクションは、約1000点位の収集であり、その500点位は、高木禮二の盆栽歴史の足跡となる盆栽でありました。

草物、花物、実物、なんでもあり、全て自分の手で育て、一鉢たりとも枯らすことなく、慈しんだものと思います。一鉢も売ることなく、好きな盆栽を買い集めた、これらの盆栽を引き受けて育てるうちに高木さんの盆栽の深さにふれたような気がしました。

私たち盆栽を職業とするものは、常に買い手の顔を意識して作品を作る、多くの人が好む作品が高く売れるのでありますから、作品のレベルが低く、個性の無い作品となるわけです。高い盆栽が名木であるとは限らないのであります。

しかし、お金を出して好みの盆栽を買い集める愛好家の鑑賞眼こそ、眼が肥えるのであり、本質を見抜く目を養うことが出来るのだと感じました。

高木さんとお付き合いさせて頂いて、感じた事は、生命の次ぐらいに大切なお金を出して、自分の好みの盆栽を買った人の眼は本物であると思いました。どのような盆栽が自分の美意識を満足させてくれるのか、実にシンプルで本質をついていると思った。

それに比べると私は常に高く売れる盆栽を目標に作ってきたように思います。

買ってくれる人の美意識を想定して作る、自己の作品に自己の美意識の全てをかけて作出してないことに気づきました。

自己の作品ではなく買い手の眼のレベルにあった作品がほとんどで、私たち商売人の作る盆栽のむなしさを感じました。

今後は、自己の美意識を満足させてくれるような作品を作っていきたいと思います。

新たな挑戦へ

私は、60才の還暦を期に、瑞祥の接木を始めました。目標30年で、一から自分で仕立てた盆栽の完成を観たいと思ったからです。

現在最も古いもので8年生です。一応、盆栽らしくなってきました。中品クラスの真の位を持った吉祥招福の伝統的な形を追求しております。

しかし、最近、一人の盆栽作家が自然美盆栽を追求して、50年の作品を引き継ぐこととなりました。

これらは、私が理想とする盆栽の素材として大変ふさわしいものであります。本人が山取の種木であるかのように作ったと豪語するにふさわしい作品でありました。

盆栽の自然美、そして個性ある樹形を表現する為には、それらを満足させてくれる素材が不可欠です。

私は、以前より、雪舟か長谷川等伯の如き、水墨の線による、松柏の美しさに魅力を感じていました。これらを盆栽で現出する、絵になる盆栽を目指して精進しております。

引き算で広げる景色

実技：野上 寿明（晴香園園主）

日本盆栽作風展第1回から30年連続出品。創作、文人部門などでの毎日新聞社賞など、数々の受賞歴を持つ野上氏に、今回依頼したのが、石付き創作で、石付き盆栽の魅力を作品でアピールしていただこうと思います。

今回の素材

作業前　石共高110cm
中国産の立ち石に３本の五葉松と真柏、添えに長寿梅が付けられ、一度は飾れる状態に作られていたものだが、この機会に付け直しをしようと準備されていた石付きである。

上の樹からはずしていく

上から、右・左・右と、石芸を消さないようにバランス良く付けられた五葉松と真柏は、足元に添えとして付けられた長寿梅による彩りと安定感で、まさに中国の桂林の景色を彷彿させていたに違いない。

しかし、しばらく持ち崩されていた姿は、付け直しを余儀なくしていた。そこで、上に付けられた五葉松から順次丁寧に石からはずされていった。当初は、全てをはずして、一からの付け直しが考えられていたのだが、２本目の五葉松をはずし、左下の真柏に手をかけようとした所で、手は止まった。「上に付けていた樹をはずしてみると、随分石の芸が引き立って見えるね」これぞ中国桂林の景色と映ったのである。

次に野上氏は、左下の五葉松をはずした。この樹も付け直しに使う予定で丁寧に。

まずは、一番上に付けられていた五葉松が、付け直しも考え、丁寧に右からはずされた。

峻険な石芸を際立たせる

付け直しを考えていた野上氏だが、上部から樹をはずして行く中、だんだん石芸が際立ってくることで、付け直すより、下に残された樹の持ち込みの味を活かしながら、厳しさをあらわにした石芸を活かすのも良いのではと考えたのである。

付け直せば、また新たな作品が生まれたかも知れないが、野上氏は引き算から発見された険峻な石芸の魅力を活かそうとしたのである。これは作家としての新たな創作と樹姿を見て頂くという意味ではインパクトも弱いかも知れないが、そこにも野上氏らしい作風は表現されていたのである。次頁の写真に見る姿が、充分その感性を語っているのではないだろうか。

足元での整姿作業

上部２本の五葉松を石からはずした所で、野上氏は〝全部はずして付け直すより、この状態でまとめた方が、石も際立ち、雄大な景色も出せるかも知れないね〟と、一からの付け直しではなく、引き算による作り替えの方向性に切り替えたのである。

側面から足元を見ると、正面からは見えないが、裏面側に真柏が付けられていたのがわかる。

同・右側面

正面足元左下、裏面に伸ばされていた真柏の枝が、左に残された真柏の一段下に覗かされた。

少し寂しい左足元に真柏の枝を覗かせるように、伸ばされていた真柏に針金がかけられた。

主木の五葉松を軽くする

枝にハズミが出て、右への流れも強調され石芸も際だった。

次に主木となる右の五葉松を軽くすると同時に、流れを出すために枝がすかされ、棚が割られた。

脳裏に浮かぶ景色を具現化してみる

ここで紹介するのは、実際には使わなくても、想像させることができる景色を具現化してみたもので、本道からは逸脱するものかも知れないが、創作盆栽への導入口としては、これからの盆栽界にはあっても良いものかも知れない。

実際、野上氏の息子さんが継いでいるリース業では、様々なフィギュアが集められ、これらを使った盆栽や植物のアレンジメント商品が全国から受けきれないほどの数の発注が入っている。

この傾向は、必ずしも盆栽からかけ離れたものではなく、つながるものがあると野上氏は言う。

具現化されたものから省略の美である盆栽を理解するための想像力を付けるには、こうした所から入って行くのも良いのではないだろうか

引き算の発想から生まれたこの姿を見て、この樹姿には実際無いものを中国の景色を思い浮かべながら想像してみて頂きたい。野上氏の脳裏に浮かんできたものを左頁では、わかりやすく演出しているので、貴方の思い浮かべたものと比べてみて頂くのも面白いかも知れない。

険峻な岩山の中腹には、楼閣を据えてみた。ここから物語は始まった。

少し行きすぎかも知れないが、岩山の裾では、夕餉のおかずとなる魚を釣る釣り人の姿も。

岩山の眼下に流れる大河には、川を下る帆掛け船の姿が、一層の岩山の険峻さを際立たせている。

岩裾には鹿などが生息し、遊んでいても、浮島ではなく連なる岩山を後方に彷彿させ、自然の景観を広げている。

岩の岐れには、楼閣につながる橋が置かれ、老師、修行僧の気配と、そこに至る道を岩山の裾まで想像させてくれる。

中国の天然の石芸が広げる景観と物語りを石付創作の中遊び心で楽しむ！

添景を使った創作盆栽は、昔からあり、盆景の道具の一つとして否定されるものではないし、石もまた盆栽の景観を助長するものとしてはこれらに準ずるものと言えなくはなく、それでも石付盆栽として評価もされている。添景を排してこれらのものが見え、物語りを読めるに超したことはないが、野上氏はより初心者にも楽しめる創作盆栽の中に、こうした取り組みもあって良いのではないかと言う。

私の「盆栽日記」

華正園　吹田 勇雄

（上段）華正園園内　（下段左）サクラメント市でのデモンストレーション　（下段右）華正園正門

私は、盆栽の中では、特に真柏の持つ神秘的な姿が好みで、銘「道芝」や「かりゆし」を見てその自然美に取り付かれ虜になりました。

北は北海道の知床や本場新潟、糸魚川など各地の真柏を見て回りました。天然のジンやシャリを持つ真柏を見ていると、盆栽のワビやサビを感じます。

元々実家が、青森の盆栽園だったので、子供の頃から自然と盆栽に親しんでいました。

ただ、スキルアップを目指すには、実力のある所での修業がどうしても必要と考え、１９８３年、上京、江戸川区の春花園に、弟子入りして、盆栽作家になる為、巾広く学ばせてもらいました。

８年間修業した後、父の死去により、実家の「華正園」を継いだ。その後、１９９８年11月に、仙台に移転、その年、アメリカ・サクラメント市で盆栽のデモンストレーションやワークショップも行いました。

師匠の小林國雄氏を初めとして、数々の方々の協力があってできたことと感謝しております。

東日本大震災

２０１１年３月11日、午後２時47分のことだった。ゴーという轟音と共に、激しい揺れが襲ってきた。サル欅が倒れ、盆栽棚が崩れた。

電気、水道、電話も一週間も使えず、お客様の安否が心配だった。　ガソリンの入手が困難な中、一人一人を確認しながら探し歩いた。　未だに発見出来ない二人のお客様がいる中、震災で津波に呑まれながらも助かった人もいる。

悪夢から４ヶ月が経過し、ガレキの撤去が進み、やっと生活が見えてきた中、お客様達もようやく我が園を訪れる様になり、又、盆栽を続けられる事を実感し、これからも盆栽作家として精進する事を心に誓った。

真柏　石　カエデ
田中泰道　平成

野梅　今井千春
平成渡正方

五葉松　野上寿明
新中国鉢朱泥

一位　吹田勇雄
烏泥木瓜

五葉松　山田寅幸
古渡紫泥浮彫八卦文獣面足丸

真柏　アウエル・オートマ
朱泥楕円

イソザンショウ　秋山　実
白交趾楕円

赤松　ピーター・ウォーレン
紫泥外縁正方

オリーブ　ロレンッオ・アニョレッティ
広東長方

表　紙：五葉松 石付き 銘 蒼穹 （20周年記念作家展 前半の 2011/9/30 ～10/5 出品予定）
発　行：日本盆栽作家協会／責任者　山田登美男　埼玉県さいたま市北区盆栽町268　清香園　TEL 048-663-3991
事務局：江口信二　埼玉県南埼玉郡白岡町野牛1062 -5　TEL 0480-92-3897